

◆教育・啓蒙著作賞

著者：木村至聖・森久聡編著

書名：『社会学で読み解く文化遺産 ―新しい研究の視点とフィールド』

出版社：新曜社

出版年月：2020年11月

文化遺産とは何なのか、誰が、何を、なぜ遺産とするのかという「遺産化」のプロセスを通じて、社会秩序・社会関係がいかに再編されるのかが問われている。本書は文化遺産をめぐる2000年以降の諸変化をとらえ、「文化遺産であること」から「文化遺産になるプロセスに着目し、「遺産化」という言葉を用い、その変化の過程や社会的影響、そして今後の可能性を描き出すことをねらいとしている。

本書は二部構成で、第Ⅰ部が研究の視点で「制度、思想、欲望、環境」と4つの研究のための視点を立てて解説している。第Ⅱ部は事例研究で、第Ⅰ部で示した研究の視点や理論化が国内外の事例研究でどのように活かされているかを紹介している。

第Ⅰ部の制度では、文化遺産の対象の変化と拡大、保存の歴史的な経緯、そのかかわりや扱いの正当性、価値の真正性、保存か開発か、国レベルから市町村レベルでのスケールの違い、社会層により異なる歴史的な価値など、文化遺産をめぐる制度を考える上での課題を提示している。思想では、文化遺産は誰がつくり、誰のものであるのかを、ナショナリズム、国家のイデオロギーの装置、集合的記憶の複数性なども用いて解説し、また文化経済学の視点から文化遺産を経済学的にみるアプローチにも言及している。欲望では、人々が過去に何を求め、なぜ文化遺産を欲望するのか、収集の欲望について歴史を振り返り概観している。今日避けて通ることができない文化の商品化の課題も示している。環境では、人々のその土地（空間・場所）とのかかわりと保存への関心、景観保存運動を通じて守るべき対象と戦略等を含めた環境について概観している。

第Ⅱ部では世界遺産、日本遺産の保存の基準や、無形遺産の遺産化、遺産登録後の変容、社会体制主義の遺産の保存、アートと文化遺産の関係性、メディアの遺産化など、社会学的アプローチで遺産別に事例を挙げ、文化遺産保存の現状と課題を幅広く知識を習得できる。

本書は、歴史的環境や文化遺産に関心を持つ、社会学系の学生、大学院生、研究者を中心とする読者層を想定している。観光学、文化人類学、民俗学、地理学、政治学、経済学、歴史学、環境学などの専門分野から文化遺産への社会学的アプローチが概観するのも役立つとしている。本書から文化遺産に保存に関する歴史的な経緯や政治的な過程、今日的な文化遺産の保存の問題や課題を社会学的な視点で学ぶことができる。現在保存にかかわる人々に多様な視点から文化遺産の遺産化についての様々な観点を提供して考察を深めること促す。関係者のみならず、文化遺産に関心を持つ多くの読者が、新たな視点で文化遺産と向き合うことができる内容である。

以上から、本書は教育・啓蒙著作賞に該当すると判断する。